なぜ超学際科学？

石井敦
（東北大学東北アジア研究センター）

インパクト

ステークホルダーが利用できる、オーナーシップを持つ研究の推進

アカウンタビリティ

研究者が社会に対する責任を果たすことができるような研究を推進

謙虚な自省的学習

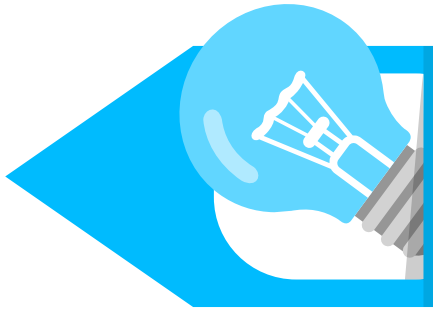
ステークホルダーとの協働の過程で、研究者が、自らの科学観の転換を含めた自省的学習の可能性を追求

出典：van der Hel, S. (2016). New science for global sustainability? The institutionalisation of knowledge co-production in Future Earth. Environmental Science and Policy, 61, 165–175.

今後の研究会で実施する内容の選択肢

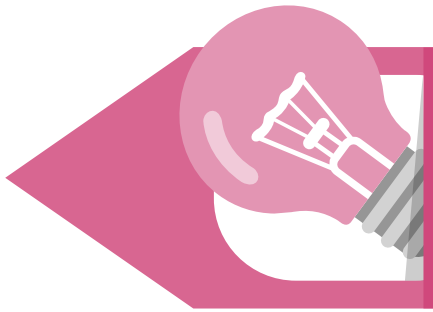
超学際科学の理論的側面
・方法論の理論的・実践的側面

01



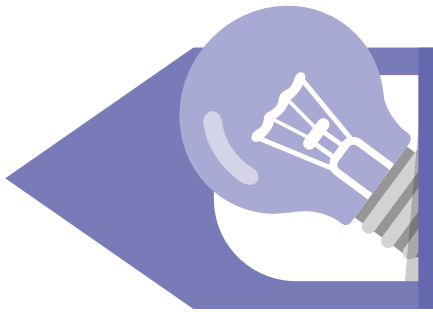
超学際科学のケーススタディ
・成功（失敗）事例の紹介
・日本の実践事例から教訓を引き出す

02



超学際科学の評価
・ステークホルダーと協働でどのように評価？
・超学際科学の評価基準をどのように設定？

03

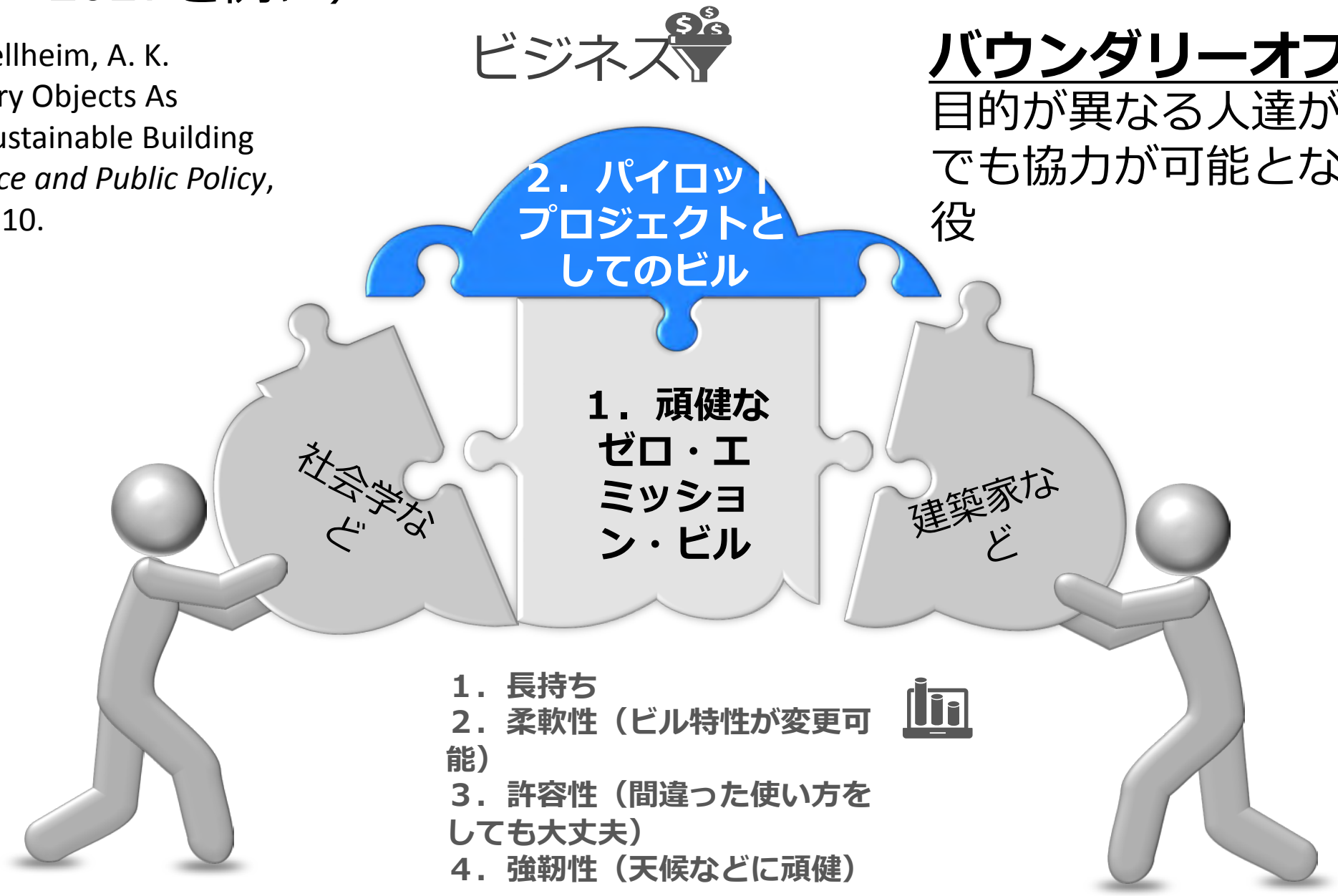


超学際科学の関連研究のレビュー
・人類世の概念に関するレビュー
・チームサイエンス

04

バウンダリーオブジェクト（Berker and Kvellheim 2017を例に）

Berker, T., & Kvellheim, A. K. (2017). Boundary Objects As Facilitators in Sustainable Building Research. *Science and Public Policy*, *45*(May), 202–210.

バウンダリーオブジェクト

目的が異なる人達が同床異夢でも協力が可能となる橋渡し役